

はじめに

弊社中学通信教育部では、教育図書出版の立場で、中学生の家庭学習の効率アップのためにささやかでもお役に立ちたいと念じて通信教育事業を行って参りました。わかりやすく力がつく教材を作るためにも、よい指導、役立つ教育相談をするためにも“中学生を正しく理解する”ことが何より大切であると考えております。

中学生を正しく理解するためには、正しい調査方法による継続的かつ広範な調査分析を欠かさないことです。幸い、教育社会学の分野でご活躍中の奈良教育大学教授深谷昌志先生が「中学生の意識」調査を快くお引き受けくださり『モノグラフ・中学生の世界』発刊にいたりました。初刊以来4年、このたび第10号を発刊することができました。

当号は、既刊の vol. 3「中学生の母親の意識」の姉妹編ともいべきもので、母親とともに生徒に大きな影響を及ぼす「中学生の父親」に焦点をあてて調査分析をいたしました。

父権の喪失などという言葉がいわれておりますが当調査の結果も参考にされ中学教育の一層の前進のためにご活用いただければ幸いです。

教育図書出版 (株)福武書店
教育研究所

加藤 智禧

モノグラフ
中学生の世界
目次
vol. 10

1982. 教育図書出版(株)福武書店 教育研究所 / 加藤智禧・雨宮紀子・木村美紀子
奈良教育大学教授 深谷昌志・千葉県教育センター所員 高橋美恵

中学生の父親 ～新しい父親像の誕生～

調査を実施して	3
本報告書の要約	4
第I章 調査の概要	
1. 調査の目的	6
2. 調査票の構成	8
3. サンプルの概要	9
第II章 父親としての姿	
1. 家庭での姿	11
2. 父親のイメージ	16
3. 父親としての発言力	19
4. 父親としての意識	23
第III章 子どもについて ～現状と将来の見通し～	
1. 子どもについて知っていること	25
2. 子どもに対する満足度	28
3. 子どもの将来	33
第IV章 父親の心の内	
1. 人生を振り返って	36
2. 現状についての満足度	39
3. 子どもの成長ぶり	44
まとめに代えて 父親像をめぐって	
1. 父と子三代 わがオヤジ像との比較	49
2. 中学生の求める父親像	53
3. 新しい父親像の功罪	56
付. 調査票見本	57

調査を実施して

調査を重ねていると、予想外の事実に驚かされることが多い。父親をめぐる調査はその代表的なものであった。「父親の権威失墜」など、弱い父の存在が指摘されることが多いが、少なくとも、何回かの調査結果は、現在の父親が、決して弱くないことを示していた。

それらの調査結果は、執筆者のひとり深谷昌志の『僕はお父さんに叱られたいー子の望む父親の条件』（東京書籍）に詳しいが、今までのデータが、サラリーマン層に偏りがちだったので、都市の下町や地方都市に住む標準的な父親を対象として、中学生の父子関係を考えてみたいと思ったのが、本調査である。

調査に協力してくださった多くのお父さま方や生徒諸君に感謝の気持ちを述べておきたい。また、報告書の作成にあたり、福武書店教育研究所の加藤智禧氏・雨宮紀子氏・木村美紀子氏のご尽力を得たことも付記しておく。

なお、本報告書は調査票の決定から執筆まで、深谷昌志と高橋美恵とで話し合いをしつつ、作成したので、各章とも二人が互いに補筆をする形となった。

昭和57年1月

奈良教育大学教授 深谷 昌志
千葉県教育センター所員 高橋 美恵

本報告書の要約

子どもたちによると、「やさしさ」と同時に「頼りがい」をも持った「心暖かく尊敬できる」存在が現代の父親像である。父性の持つ強さを残しつつ、それに母性的な暖かみが加わったともいえよう。そうしたパートナー型の父親のあり方は、子どもたちからの支持を得ており、多くの子どもたちは、父親を尊敬している。

ただ、「心暖かく、かつ、尊敬できる」という父親は、子どもたちにとって理想的でありすぎ、そのため、子どもたちは、父親を越えにくいと思っている。その結果、サンプルが中学生にもかかわらず、子どもたちが父親に反抗をする兆しが認められない。

こうした父親のあり方が、子どもたちの自立の遅れを招くのではないかと気がかりである。

- ① 中学生を持つ父親2,256名と、その子1,015名（1/2抽出）をサンプルとした。
（P.9 表1）
- ② 調査対象は、大都市の下町と地方都市に住む標準的な父親である。
（P.9,10 図1・2・3）
- ③ 7割近くの父親は、定時に帰宅し、夜は、テレビを見ながら、家族だんらの時を過ごしている。（P.14 図8）
- ④ 父親のイメージは、「心暖かく、意欲的」にシンボライズされている。
（P.18 図10）
- ⑤ 家庭内での父親の発言権は、妻と相談しながら、リーダーシップを持つというパートナー型である。（P.21 表4）
- ⑥ 85%の父親が子どもに満足している。
（P.28 図16）
- ⑦ 成績がよく、やる気に富み、その上、親子のコミュニケーションが順調だと、子どもに対する父親の満足度が増す。
（P.32 図19）
- ⑧ 大きな期待は持てないが、「人並みの暮らしぐらいはできるだろう」と、父親た



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

■第 I 章

■調査の概要

1. 調査の目的

父親の姿は変わったのか

父親を語るときに、かならずというほど、「ダメ親父」とか「権威の失墜」、「揺らぐ父親の座」というような言葉がついてまわる。

しかし、子どもたちと話していると、そうした指摘が誇張にすぎるように思うことが多い。尊敬ができ、頼りがいのある存在として父親をみている子どもが少なくないからである。とはいいながら、彼らの語る父親像が、一昔前のそれと変わっているのも否定しがたい。近よりがたさなどの感情が薄れ、やさしい父という面もうかがえるからである。

となると、父親をめぐる問題は、父親のモ

デルをどうとらえるかにかかっているように考えられる。

これまで、家族社会学などで、父親について叙述するときは、アメリカの社会学者・パーソンズ(T. Parsons)の図式をふまえることが多い。『核家族と子どもの社会化』(*The Family*)によると、父親の役割は「手段的」(Instrumental)としてとらえられ、母親の「表出的」(Expressive)な役割と対比される。つまり、家族のメンバーを精神的にくつろがせる暖かい存在が母親で、それに対し、子どもたちを社会的に動機づける厳しい存在が父親という把握である。

ユング派の心理学者・河合隼雄氏は『母性

社会日本の病理』の中で、父親を「切る」、母親を「包む」存在として、対称的にとらえる図式を提出している。優劣を厳しく弁別するのが父親だとするならば、母親は平等な愛をふまえる。非行を犯した子を、何とかかくまおうとする「包む」存在が母親であり、わが子の罪は罪として「切る」のが父親という認識である。

両者のように、理論的に構築されていないにせよ、経験的にも、父と母とを両極に配置する見方が流布している。儒学で、男女を陽と陰としてとらえるのがそのひとつであろうが、両者を対称の軸に置き、父親に権威や厳しさ、たくましさを、母親に愛情ややさしさ、暖かさを求めるパターンである。

歴史的にとらえると、日本のように自給自足型の農耕社会が続いたところでは、男性は外へ出て働き、女性は家庭内のきりもりをするという形の性に伴う役割の分化が定着した事情は理解できる。しかも、明治以降、家族制度が政策的にも支えられていたので、一層、家長としての父、内助の功を尽くす母という対称が鮮やかになりがちであった。

しかし、戦後三十有余年を経て、あらためてふれるまでもなく、家族をめぐる状況は大きな変貌を経て、現在を迎えている。端的に言って、そうした変化は、性差の縮小という形で進展してきた。一方において、家事や育児の合理化や社会化が進んで、多くの母親たちは、家庭の束縛から解放され始めたし、他

方、労働時間の短縮や肉体的な疲労の軽減などの結果、父親たちが労働に拘束される比率が相対的に低下している。そして、両親ともに、性に伴う役割の分化を強制される度合の少ない社会を迎えている。

そうであるとするならば、父親像が変化したとしても当然のように思える。かつての社会の父親像をモデルとして、父親論を説くのは、昭和の始めの家庭をイメージに置いて、家庭論を展開するのと同じで、時代錯誤の感を免れない。

こうした問題意識に基づいて、**現代の父親像をありのままにとらえてみたい**と思ったのが、本報告書の目的である。

なお、中学生の父子関係は、従来の通説では、第二次反抗期とよばれ、父と子、特に父親と息子との関係が最も冷却する時期といわれてきた。親のひごの下で生活してきた子どもたちが、自分の世界を求めて自立しようとする。そうした自立の過程で、親を避け、自分の殻にこもる。その際、社会的な権威の象徴として、子どもの反抗に胸を貸す存在が父親だったといわれる。そうしたとき、**父親のやさしさが増すことが、子どもの反抗期と、どう関連するのかが気がかり**である。

そこで、本調査では、**父親の姿を縦軸に、そして、反抗期の問題を横軸に据えて、中学生の父子関係を掘り下げていく**ことにしたい。

2. 調査票の構成

本調査の調査票は、中学生を持つ父親自身に答えてもらうものと、中学生の子どもたちに答えてもらうものの二部構成となっている。詳細については巻末に調査票を添付したが、

それぞれほぼ次のような構成になっている。なお、紙面の都合上、子ども用の調査票は割愛した。

〈父親用〉

①Face Sheet

— 年齢・職業・学歴など —

②父親としての自分

- 家庭生活 • 父親イメージ
- 父親の発言力
- 子どもについて知っていること
- 父親として心がけていること

③子どもについて

— 現状と将来への見通し —

④父親の心情

- 人生を振り返って
- 人生への満足度 —
- 仕事と家庭
- 現状についての不満 —
- 子どもの成長につれて
- 追い越される側の気持ち —

⑤理想の父親像

- 自分の父親と比べて

〈子ども用〉

①Face Sheet

— 性別・学年・成績など —

②子どもからみた父親の姿

- 家庭生活 • 父親イメージ
- 父親の発言力
- 子どもについて知っていること

③父親の心情

- 人生への満足度
- 家庭への不満

④未来の自分と比べて

- 父親にかなわないもの
- 父親ぶりの比較

⑤今、父親を越えている力

3. サンプルの概要

調査対象は、東京都・静岡県・福島県にある5つの公立中学校の生徒(1年～3年)とその父親で、サンプル総数は中学生1,015名と父親2,256名である。中学生のサンプルについては、父親とほぼ同数の回答が得られたが統計処理の都合上、全体の約50%にあたる1,015名を抜き取って分析することにした。中学生のサンプルの内訳は、表1に掲げた通りである。

調査の実施は、昭和56年7月に、それぞれ学校経由で調査を依頼した。

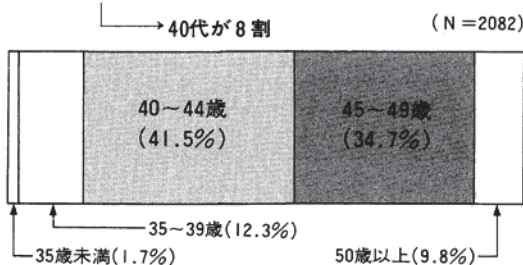
対象となった父親の年齢構成は、図1に掲

げた通り、40歳から49歳までの者が76%とほとんどを占め、平均年齢は44歳となっている。30代後半から50代前半まで、まさに働き盛りの中年層である。職業の内訳(図2)では、技能・セールス49%と半数近くを占め、次いでいわゆるホワイトカラー27%、自営業16%の通りである。調査を依頼する際、平均的な父親像の抽出をイメージに置いたが、技能職や自営業など自分の腕一本で家族を養っているという父親たちが多くいたのである。

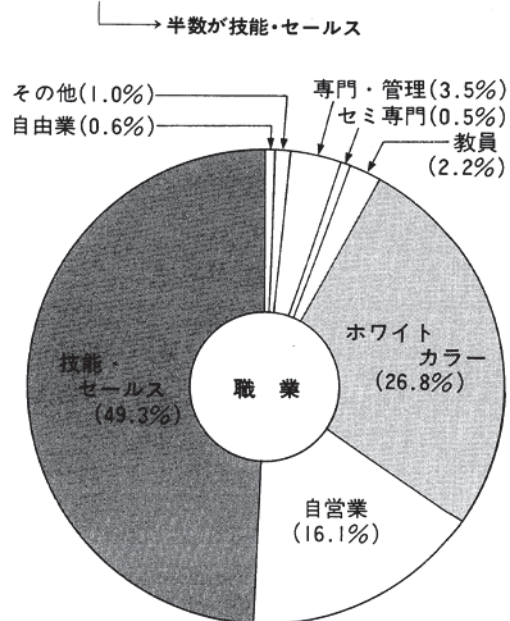
(表1) 中学生のサンプル数 (人)

	男子	女子	全体
1年	141	133	274
2年	175	183	358
3年	201	182	383
全体	517	498	1,015

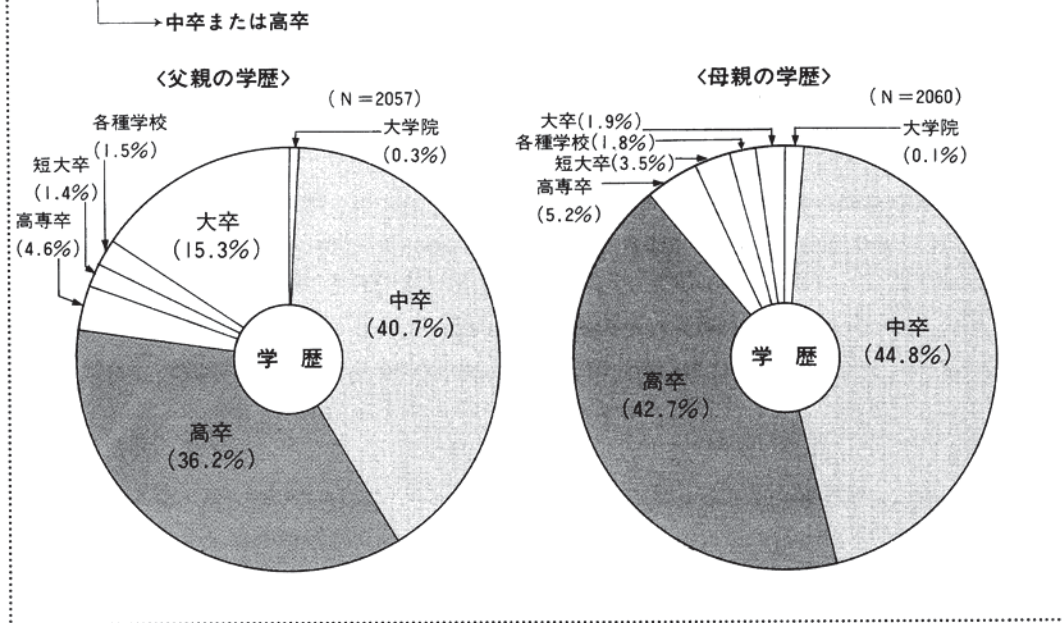
<図1> 父親の年齢



<図2> 父親の職業 (N=1773)



〈図3〉 父親・母親の学歴



〈図4〉 子どもの数

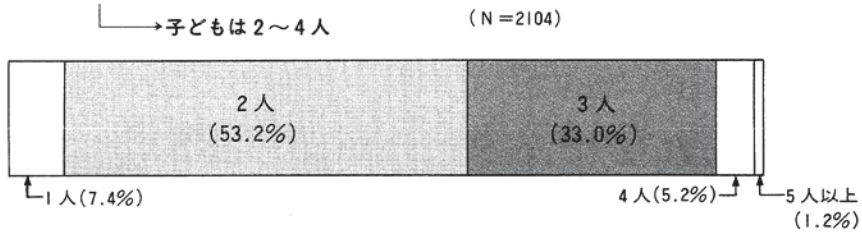


図3に、父親と母親の学歴を掲げた。中卒者が父親で41%、母親で45%と最も高く、高卒者36%、43%である。高卒以上の学歴者は父親23%、母親13%と、現在の感じからすると、やや少なめの感じを与えるが、サンプルが40代半ばということを考えると、学歴構成は、ほぼ標準的なものといえよう。

このように、職業・学歴とも、大都市のサラリーマン型とは違ったタイプの父親像をのぞかせている。

子どもの数(図4)は、平均2.4人。ひとり

っ子は7%と少なく、3人以上が4割とこれまた都市型に比べ、やや多い。

中学・高校を出て30年あまり。社会の荒波にもまれながら腕をみがき、独力で一家を構え、そして、自分の腕一本でガッシリと家族を支えてきたタイプの父親たちがサンプルの中核をなしているようである。

なお、サンプルの居住地は、入谷や大塚などの東京都の下町と、郡山市と浜北市の地方都市とに、ほぼ二分されていることを付記しておきたい。



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

■ 第II章 ————— ■ 父親としての姿

1. 家庭での姿

定時に帰宅がほぼ7割

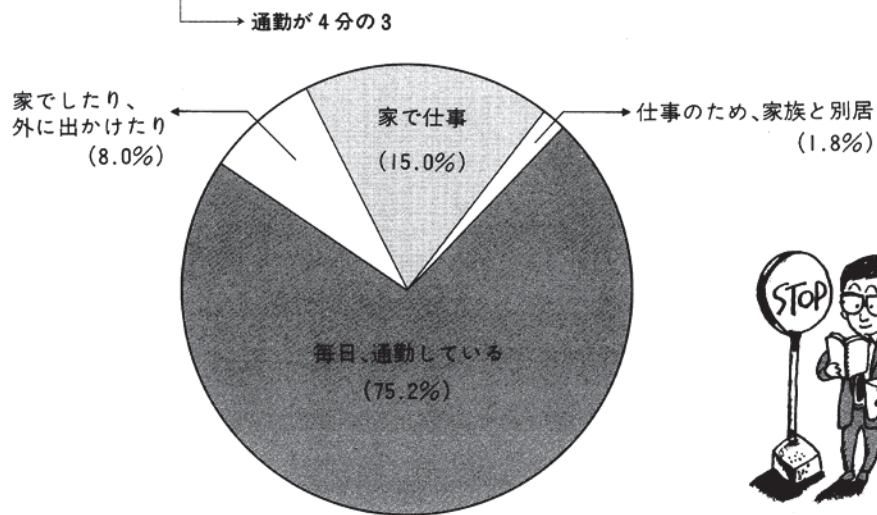
40代の半ばといえば、働き盛りの年齢である。といっても、仕事の重荷がぐんとおしかかる一方で、若い人たちと先輩との間にはさまれ、中間管理職層としての苦勞が増す年齢でもある。家庭へ帰れば、高校進学を控えて、子育ての問題も子どもが小学生のころより、暗さや深刻さを帯びがちになる。加えて、健康にもかげりが見え始める。

仕事の面での自信と様々な不安とが、光と影のように織りなし、ともすると、影の部分がちらつき始めるのが、40代半ばの父親たちの心境であろう。しかし、そうした考察へ入

る前に、もう少し細かく、家庭における父親の姿を概観しておくことにしたい。

図5は、家庭と職場とが分離しているかどうかをたずねた結果である。やはり、「毎日、仕事場に通っている」父親が75%と、4分の3を占める。また、わずかではあるが、仕事のために家族を離れて暮らさなければならない父親も2%ほどいる。サンプル構成のところで、ホワイトカラー層が少なく、技能・セーブルス職層が多いという割には、職住分離の割合が高いように思える。「家で仕事をしている」(15%)や「家でしたり、外へ出かけたり」(8%)と、仕事をする父親の姿を子どもに見せる機会を持っている親は、意外に少ない。

〈図5〉 住まいと仕事



もっとも、職場と家庭との通勤時間は、

- 1. 0分……………19.6%
- 2. 1分～30分……………56.6%
- 3. 31分～1時間……………16.4%
- 4. 1時間1分～1時間半……………4.9%
- 5. 1時間31分以上……………2.5%

の通り、「家庭から職場まで30分もあれば通える」という父親が半数を越える。

都市に住むサラリーマンの場合、郊外の新興住宅地にマイホームを求めようとすれば、1時間半程度の通勤時間を覚悟しなければならない。当然、朝食は子どもたちより一足早く、また夕食も一人遅れてすませ、そして、翌朝の準備をする具合になる。時には、仕事の憂さを晴らしに一杯飲むか、あるいは、マージャンをしたりすると、夜遅くの帰宅となる。

しかし、しあわせなことに、本サンプルの場合、「平日の帰宅時間」は、

- 1. 毎日決まっている……………12.8%
 - 2. だいたい決まっている …… 39.3%
 - 3. まあ決まっている……………14.9%
- } 67.0%

- 4. あまり決まっていない …… 23.6%
 - 5. 全く決まっていない……………9.4%
- } 33.0%

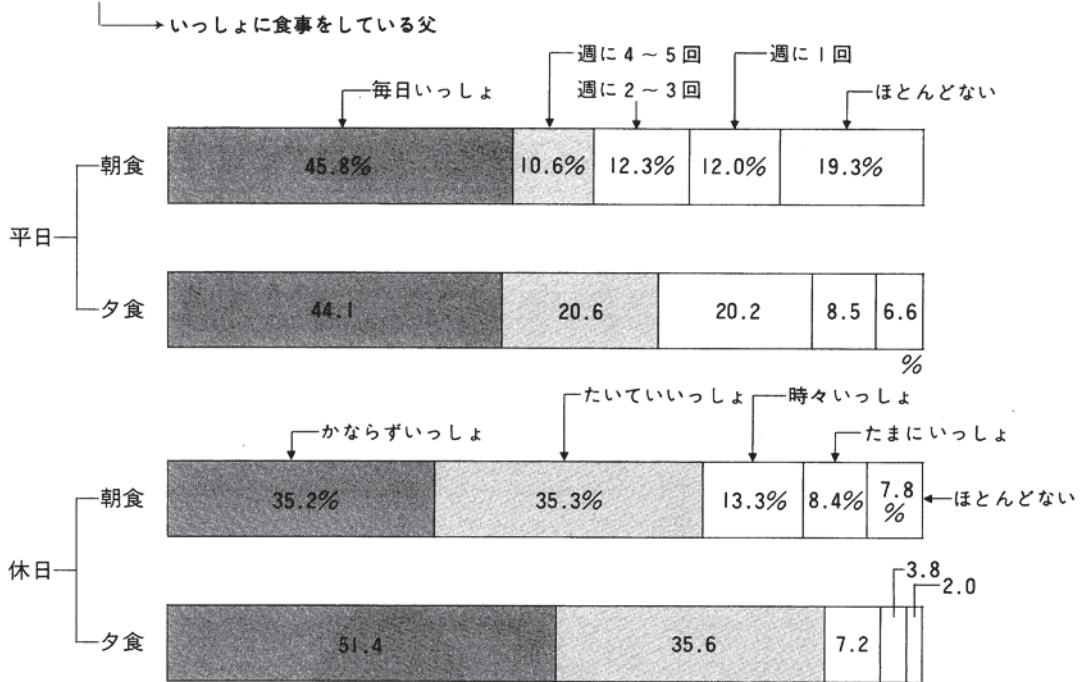
の通り、ほぼ決まっている者が7割に達する。

そうしたデータを裏づけるかのように、図6によると、「家族といっしょに毎日、朝食や夕食を食べている者」は4割を越え、「週に4～5回」を含めると、6割に達する。

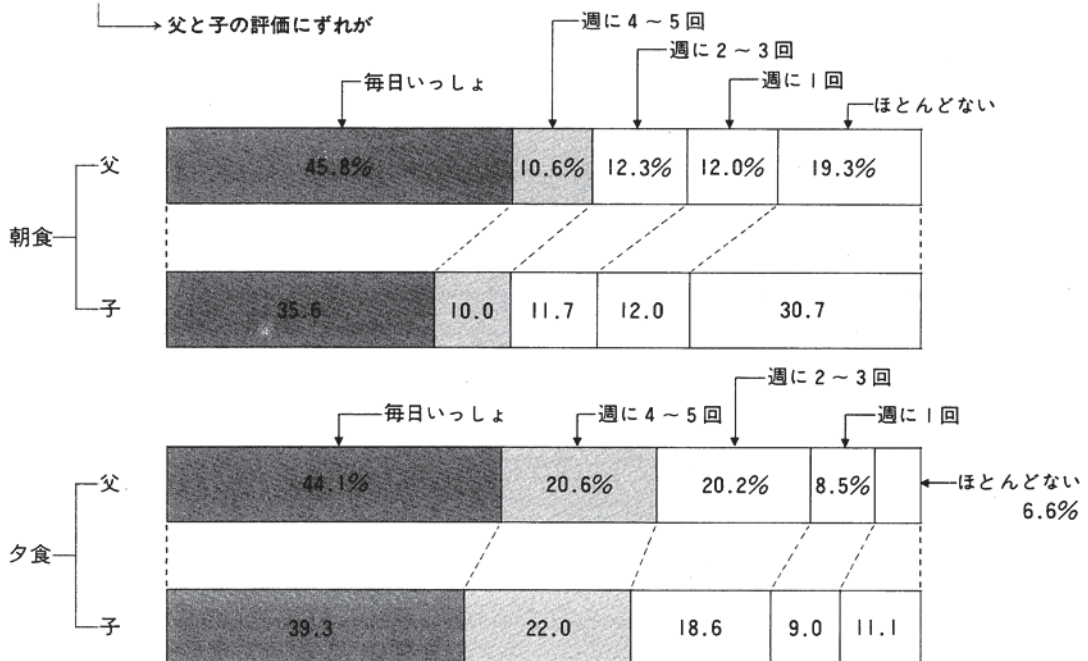
父親というと、通勤に疲れきったサラリーマンの姿を思い浮かべがちになる。たしかに、そうしたあり方が、父親のひとつのモデルであることは否定しがたい。そして、マスコミの送り手も大都市に集中しているから、そうした身近な父親像を描きがちになる。しかし、量的に把握するなら、本サンプルのように、通勤時間が30分程度で、きちんと帰宅し、家族といっしょに夕食を食べる父親たちの方が多数を占めるのではないだろうか。

もっとも、図7の子どもたちの証言によると、父親が思っているほど、規則正しい生活をしているわけではないらしい。仕事が忙しかったりして、帰宅が不規則になっているのを、父親自身は忘れていからであろうか。

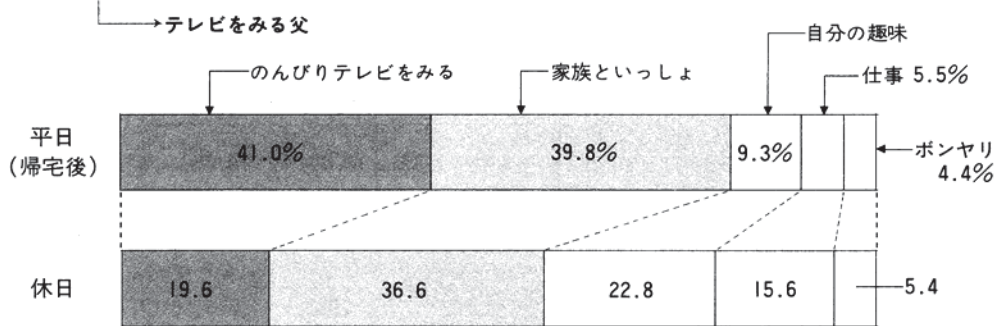
〈図6〉 家族と食事をする頻度



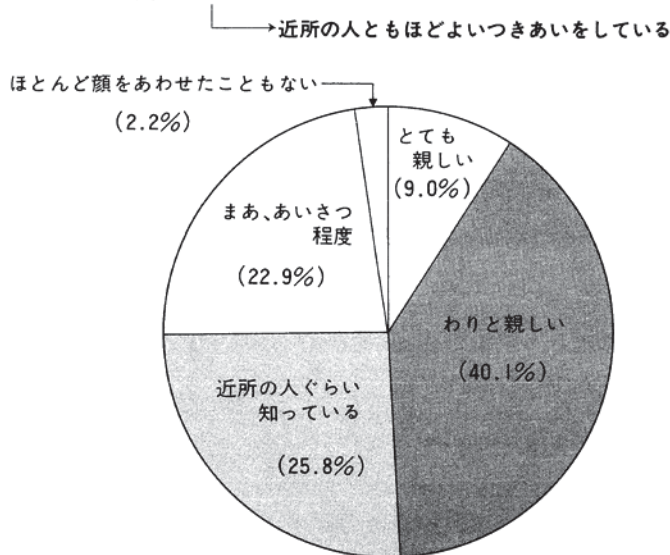
〈図7〉 父親と子どもの回答の差 ~平日いっしょに食事をする頻度~



〈図8〉 家庭での過ごし方



〈図9〉 近所づきあい



夜はテレビをみてくつろぐ

たいてい決まった時刻に帰宅し、家族と夕食をともにする父親たちのその後の過ごし方について、もう少し追ってみることにしたい。

「仕事部屋や書斎を持っているか」については、

- 1. 特にない……………63.6%
 - 2. それに近いものはある …… 20.5%
 - 3. ある……………15.9%
- } 36.4%

と、特に決まったプライベート・スペースを持っていない父は6割を上回っている。そうしたことを裏書きするかのように、帰宅後の過ごし方を「のんびりテレビをみる」から「何となくボンヤリしている」の5つの選択肢でたずねてみると、図8のような結果が得られる。平日の帰宅後は「のんびりテレビ派」が41%、「家族とのだんらん派」が40%と、居間でくつろいで過ごす父親が8割を越える状況である。これが休日になると、「テレビ派」が半減し、

「自分の趣味のため」に過ごす父親23%や「仕事がらみの外出」16%などが多くなってくる。しかし、何といても「家族とのだんらん派」37%がトップで、家族との時間を大切にするマイホーム志向型の父親の姿が多い。

もっとも、この場合も、子どもたちによると、「平日の帰宅後の過ごし方」は、

(子ども) (父)

- テレビをみる……………52.5% > 41.0%
- 家族といっしょ……………28.2% < 39.8%
- 趣味……………7.6% ≒ 9.3%
- 仕事……………6.1% ≒ 5.5%
- ボンヤリ……………5.6% ≒ 4.4%

となっている。残念ながら、子どもの目につる父親の姿は、「テレビの娯楽番組をみてい

いる」に象徴されるらしい。

さらに、どっしりと家庭に根をおろしている父親像の一端をのぞかせるデータが図9である。これは、どのくらい近所づきあいをしているかをたずねた結果であるが、「地域の世話役などもして、とても親しい」という父親9%、「わりと親しくしている」40%と半数にのぼる父親がかなり地域社会とも結びついた生活をしている。

すでにふれたように、本サンプルの住んでいるところは、入谷や大塚などの東京の下町、そして、福島県の郡山市、静岡県の浜北市と、地域的に安定した小都市なので、上記のような地域の中に住む姿となったのであろう。

2. 父親のイメージ

心が暖かく、頼りにもなる

中学生ともなれば、子どもたちも父親に対して鋭く観察し、厳しい批判を始める。時折的をえた鋭い指摘に驚かされることもあるだろう。そうした子どもたちが、どんな父親像を抱いているのか気になるところである。ここでは、父親がどんな父親として子どもの目にうつっているのかをまず父親自身にたずねてみた。「中学生のお子さんからみて、あなたはどんな父親だと思われますか」のアイテム（質問項目）を用い、「①心が暖かい——心の冷たい」というように一対ずつの印象尺度20項目について評定してもらった。表2には、ポジティブな印象項目に対する肯定率の高い順に示してある。

表中の数値を、意味的にとらえ直すと、

2位 意欲的	1位 心の暖かい
4位 頼りになる	3位 子ほんのう
5位 尊敬できる	8位 理解のある
6位 忙しい	9位 話しやすい

のような2系列に分かれる。つまり、父親自身は、「頼りがいがあると同時に、心暖かい」存在として、自分を認識している。

そして、くしくも、⑬の設問で、民主的と権威的とが、4対6とに分かれている。つま

り、権威を保ちながら、民主的なふんい気を持った存在が、現在の父親像なのであろう。

しかし、表2は、あくまで、父親自身の自己評価なので、あらためて、子どもたちの描く父親像を、父親の自己評価と対比させて示してみよう。

図10に目を通して欲しい。⑭仕事一途、⑰おしゃれ、⑱デリケート、⑩気が弱いなどの面で、多少の開きが認められるものの、全体としてみると、子どもの抱く父親像は、父親自身のそれと、ほとんど一致した軌跡を描いている。

つまり、「心が暖かく（①）子ほんのうの（③）上に、意欲的で（②）頼りになる（④）」という硬柔合わせを持った父親像である。

冒頭でふれたように、従来の父親論では、「意欲がある上に頼りがいがある」が父親のモデルとされ、「心が暖かく、理解がある」の面は母親らしさを象徴するといわれてきた。そうした意味では、父親らしさを残しつつも母親らしさを増したのが、現在の父親像のように考えられる。父親のそうした「心の暖かさ」が、一昔前の父親をイメージに置くと、頼りない感じを与えるのかもしれない。

(表2) 父親自身がとらえている父親像

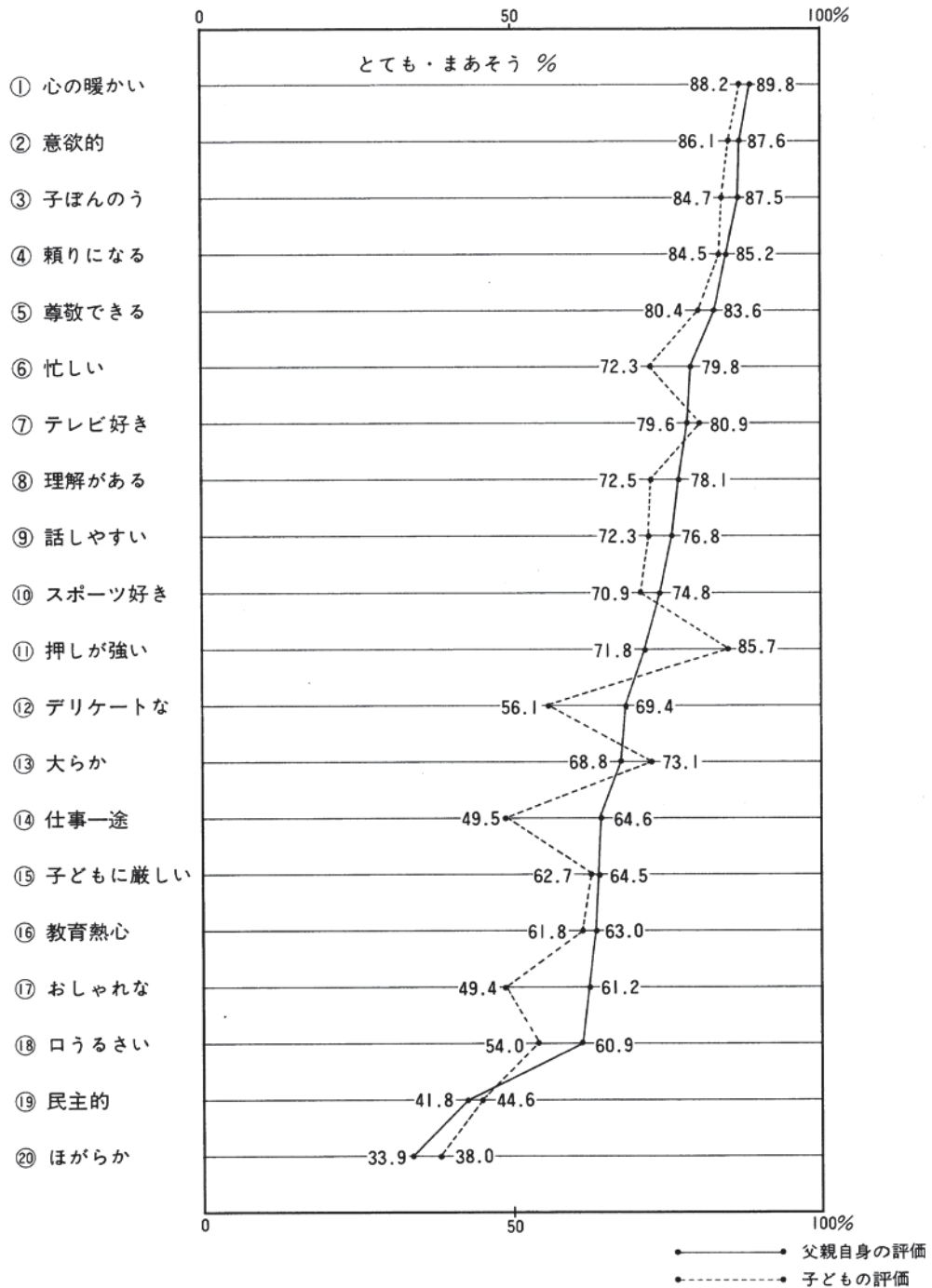
└─→ 意欲に富み、心が暖かい

(%)

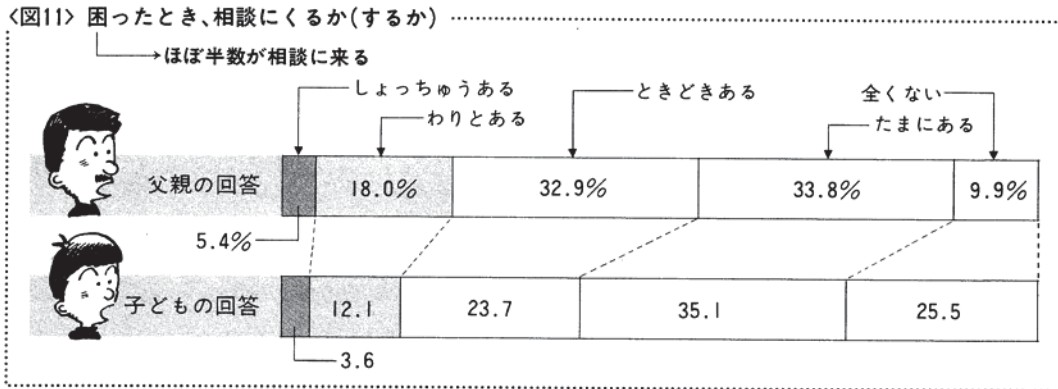
	とてもそう	まあそう	まあそう	とてもそう	
① 心の暖かい	33.7	56.1	9.4	0.8	心の冷たい
	└─89.8─┘		└─10.2─┘		
② 意欲的	31.3	56.3	10.9	1.5	無気力
	└─87.6─┘		└─12.4─┘		
③ 子ほんのう	36.4	51.1	11.3	1.2	子ども嫌い
	└─87.5─┘		└─12.5─┘		
④ 頼りになる	30.8	54.4	12.0	2.8	頼りにならない
	└─85.2─┘		└─14.8─┘		
⑤ 尊敬できる	21.9	61.7	14.8	1.6	あなどれる
	└─83.6─┘		└─16.4─┘		
⑥ 忙しい	37.2	42.6	16.8	3.4	のんびりしている
	└─79.8─┘		└─20.2─┘		
⑦ テレビ好き	23.7	55.9	17.5	2.9	テレビ嫌い
	└─79.6─┘		└─20.4─┘		
⑧ 理解がある	21.7	56.4	18.0	3.9	頭が固い
	└─78.1─┘		└─21.9─┘		
⑨ 話しやすい	28.8	48.0	18.8	4.4	話しぶらい
	└─76.8─┘		└─23.2─┘		
⑩ スポーツ好き	36.6	38.2	18.4	6.8	運動嫌い
	└─74.8─┘		└─25.2─┘		
⑪ 押しが強い	23.0	48.8	24.6	3.6	気が弱い
	└─71.8─┘		└─28.2─┘		
⑫ デリケートな	13.0	56.4	26.3	4.3	無神経な
	└─69.4─┘		└─30.6─┘		
⑬ 大らか	21.4	47.4	24.4	6.8	几帳面
	└─68.8─┘		└─31.2─┘		
⑭ 仕事一途	25.7	38.9	25.6	9.8	家庭を大切にする
	└─64.6─┘		└─35.4─┘		
⑮ 子どもに厳しい	12.7	51.8	28.0	7.5	子どもに甘い
	└─64.5─┘		└─35.5─┘		
⑯ 教育熱心	10.3	52.7	31.3	5.7	無関心
	└─63.0─┘		└─37.0─┘		
⑰ おしゃれな	14.8	46.4	31.0	7.8	無精な
	└─61.2─┘		└─38.8─┘		
⑱ 口うるさい (干渉的)	15.6	45.3	32.6	6.5	放任的
	└─60.9─┘		└─39.1─┘		
⑲ 民主的	9.1	32.7	41.8	16.4	権威的
	└─41.8─┘		└─58.2─┘		
⑳ ほがらか	6.7	27.2	45.2	20.9	怒りっぽい
	└─33.9─┘		└─66.1─┘		

〈図10〉 父親像 ～子どもの抱くイメージとのちがいを～

└───> ほとんど一致している



3. 父親としての発言力



父親に相談をする者は7割

「やさしい上に頼もしい」父親が、頼もしさを保っているかどうかは、家族、特に、子どもから信頼されているかによる。そうした信頼の程度は様々な角度からとらえるのが可能であろうが、ここでは、主に父親の発言力を中心として考察を進めていきたい。先回りをした指摘をするなら、かりに父親たちが子どもから信頼をかちえているなら、やさしさを帯びた父もまたよしという結論になる。

日ごろ、生活のさまざまな部分で子どもと接触している母親と違って、父親の頼もしさは、非日常的な、イザというとき発揮されやすい性格を持つ。何か問題が起こったとき、父親の意見や判断が重要な解決のカギとなるならば、家族にとってこれほど頼もしい存在はあるまい。

まず、子どもたちがどのくらい父親を頼っているか、相談に行く頻度からみたものが図11である。「なにか困ったときお父さんに相談

しますか」とその頻度を父親と子どもにたずねた結果を示した。父親の回答の方が全般に頻度が高くなっているが、相談にくることが「しょっちゅう・わりとある」と答えている父親が23%、「ときどきある」まで含めると56%となり、けっこう子どもから頼られ、相談されていると父親たちは答えている。また逆に、相談されることが「全くない」という父親は10%にすぎない。このように子どもとの関係が密接な父親の姿があらわれている。一方、子どもの方も、父親に「しょっちゅう・わりと」相談している者が16%、「ときどき」する者が24%と4割前後が父親を頼っていくと答えている。もう父親に相談に行くことなど「全くない」という子どもは26%であるから、厳しく見積もっても、4割、やや甘い見方をすれば、4分の3の父親は、子どもから頼られている計算になる。

こうした傾向を父親イメージと重ね合わせると、頼もしく、理解もあり、話しやすいお父さんと相談する子どもの光影が浮かんでく

(表3) 父親に相談に行く頻度×学年差 (子どもの回答)

→学年が上がるにつれて、父親離れの傾向が…

(%)

	しょっちゅう ある	わりと ある	ときどき ある	たまに ある	全く ない
1年	5.6	14.2	28.5	34.8	16.9
	└─19.8─┘		└─63.3─┘		
2年	2.3	13.6	22.8	32.7	28.6
	└─15.9─┘		└─55.5─┘		
3年	3.5	9.3	21.1	37.6	28.5
	└─12.8─┘		└─58.7─┘		



る。しかも、小学生ならともかく、中学生の父子関係としては、親しみやすさが印象的で異様な感じがしないでもない。そこで、発達的にみてどうなのか、子どもの回答を学年別に追ってみた。表3がそれである。学年が上がるにつれ、相談に行く頻度は少しずつ減少する傾向が認められるが、その差は意外に小さい。特に、中1と中2のところで「全く相談にいかない」子どもが17%から29%と親離れ傾向を示しているのが目立つ。しかし、全体としては、中3の子どもでも、程度の差こそあれ、7割の者が、父親のアドバイスを頼りにしている。

パートナー型の指導性

しかし、表3の中で気になるのは、相談をするというときの内容であろう。

そこで、実際にどんな場面で父親の発言力が意味を持つのかを知るために、表4にある8つのアイテムを用いることにした。具体的には子どもが①「ステレオやテープ・デッキなど大きな買物をするとき」、父親と母親のどちらの考えで許可するかというふうに、8つの場面について父親に答えてもらったものである。

表中の数値から、2つの傾向を指摘することができよう。まず、第1に、「半分半分」の欄が示すように、多くの項目で、父親と母親とが相談をして、両者の意見で決めるという反応が目につく。⑤の「日帰り旅行」や⑥の「クラブをやめる」などについても、半数の父親が、自分も発言し、ある程度、意見が通っていると答えている。

正直なところ、仕事に忙しい父親たちは、家庭内のことを、もう少し、母親任せにしているのではと予想していた。しかし、多くのことを、両親と合議をする。そうした意味では、夫と妻との二人三脚の形で問題を処理する「パートナー型の夫婦像」をうかがわせるデータである。

そうした傾向の中で、父親、あるいは、母親優位の項目を調べてみると、

(父親) (母親)

- (1) 父親優位 ①大きな買物……50%:11%
- ②進学校の決定……28%:9%
- ③泊まりがけ……25%:19%
- (2) 母親優位 ①こづかいの額……18%:47%
- ②休日の使い方……17%:45%
- ③クラブをやめる……21%:27%

の通りとなる。つまり、日常的な行為については、母親の裁量が大きくものをいうが、非

(表4) 父親としての発言力

└─→母親との合議型が多い

(%)

	全く 父親の意見	たいてい 父親の意見	半分半分	たいてい 母親の意見	全く 母親の意見
① 大きな買物をするとき	22.4 └─★50.1─┘	27.7	38.1	8.6 └─11.8─┘	3.2
② 友だちの家に泊まる時	14.5 └─29.0─┘	14.5	★41.1	22.7 └─29.9─┘	7.2
③ 進学についての決定	10.1 └─27.5─┘	17.4	★63.9	6.7 └─8.6─┘	1.9
④ 泊まりがけの合宿や旅行 に行くとき	11.1 └─25.2─┘	14.1	★55.5	14.8 └─19.3─┘	4.5
⑤ 友だち同士での日帰り 旅行	10.6 └─23.3─┘	12.7	★49.6	22.1 └─27.1─┘	5.0
⑥ クラブや部活をやめる とき	8.2 └─21.1─┘	12.9	★51.7	22.5 └─27.2─┘	4.7
⑦ こづかいの値上げ	6.5 └─17.8─┘	11.3	34.8	36.6 └─★47.4─┘	10.8
⑧ 休日に映画をみにいった りするとき	6.6 └─16.5─┘	9.9	38.4	37.1 └─★45.1─┘	8.0

★：最頻値

日常的で、大きな決定を必要とすることがらは、母親と相談しつつも、父親の意見がリードをする傾向が得られている。

昔のデータを持っていないので、比較の仕様もないが、かつての専制型の父親に代わって、パートナー型が登場したという意味では、頼りなさが感じられるかもしれない。しかし、企業の社長や政治家など、社会全般の風潮として、カリスマ型のリーダーが減り、合議型の指導者が増加している。そうした変化を視野に入れると、父親のあり方も、時勢に合ったものといわざるを得ない。しかも、すでにふれたように、合議型であるにせよ、父親がリーダーシップを発揮しているのはたしかであり、そうした意味では、父親の権威は低下していないともいえよう。

しかし、念の為に、子どもたちは、どうみているのかを検討してみよう。図12に示したように、全体としてみると、父親の評価はおおむね妥当のように考えられる。しかし、進学校の決定に例をとると、

(父親) (半分半分) (母親)

- ① 父親自身……………28% 63% 9%
- ② 子どもの評価…20% 66% 14%
- ②-① - 8% + 3% + 5%

また、泊まりがけの旅行についても

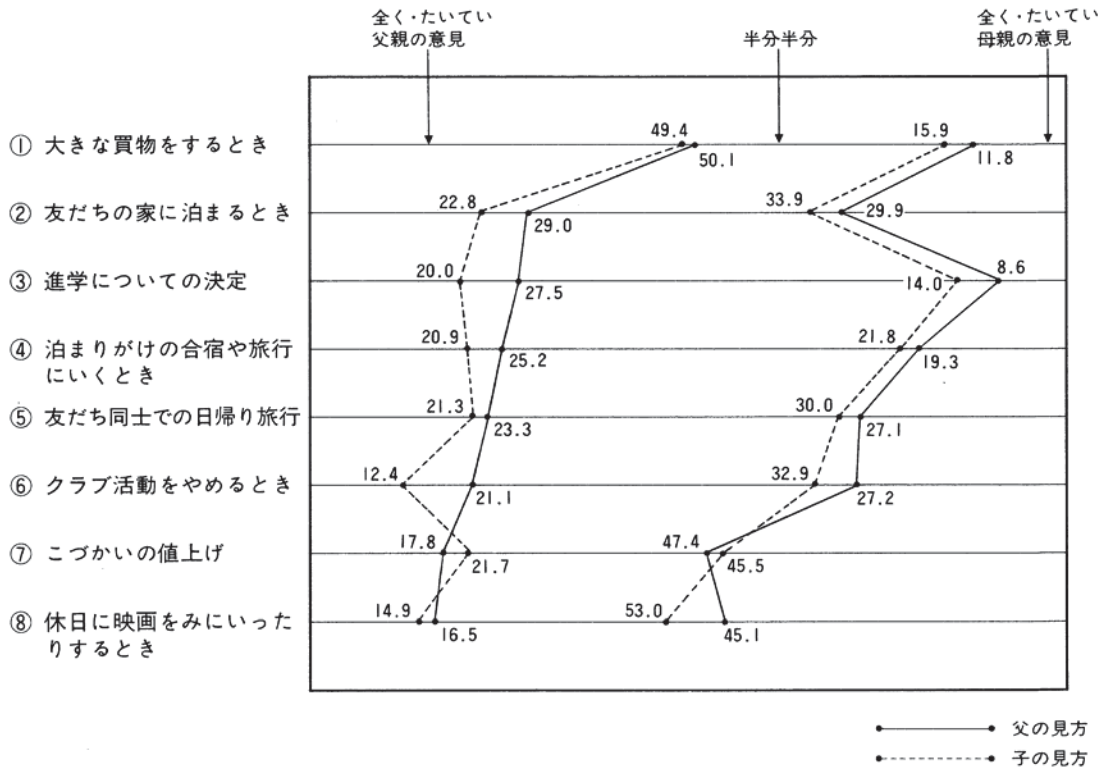
- ① 父親自身……………25% 56% 19%
- ② 子どもの評価…21% 57% 22%
- ②-① - 4% + 1% + 3%

のように、父親が思うほどには、父親はリーダーシップを発揮しておらず、もう少し、母親の発言の方が強いようにも考えられる。

〈図12〉 父親と母親の発言力（父と子の見方）

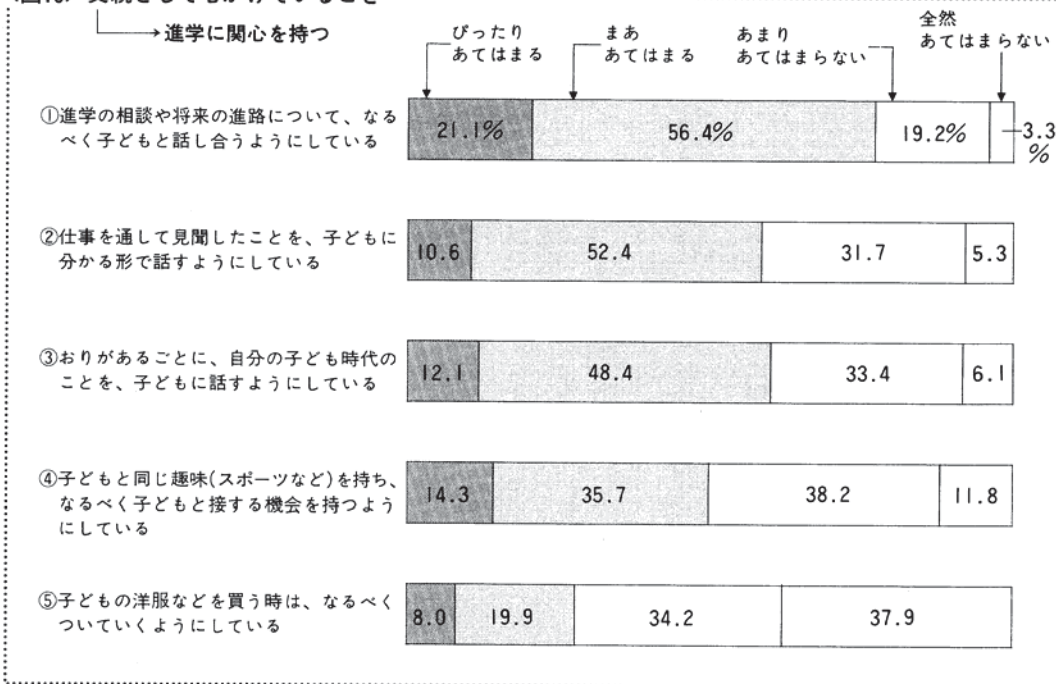
↳ 子どもからみても合議型の両親

(単位:%)



4. 父親としての意識

〈図13〉 父親として心がけていること



子どもに愛着する父親

今までふれてきたように、厳しさとやさしさを兼ね備え、妻と相談しながら、それなりのリーダーシップを発揮しているのが、現代の父親像であった。

しかし、子どもたちは中学生となり、何かと、難しい時期を迎えている。こういう時期に、父親たちは、**どんなことを心がけて、子どもと接しているのでしょうか。**

図13に示したように、①「将来の進路の相談」から⑤「買物についていく」までの5つの項目をあげて、それらに、どの程度、積極

的な態度をとっているかをたずねてみた。

図中の数値が示すように、多くの父親たちは、「子どもの洋服を買うときに、積極的についていく」気持ちはないが、「仕事で見聞したことを話し」たり、「進学や将来の進路」についての相談には、積極的に努力したいと答えている。細かいことはともあれ、子どもの将来に関しては、強い関心を抱いているらしい。

父親としての自覚がしっかりしていると思う反面、「進学や将来の進路について、なるべく子どもと話し合うようにしている」父親が、「まあ」を含めて、78%と、8割近くに達し、「まったく関心を持たない」親が3%という数

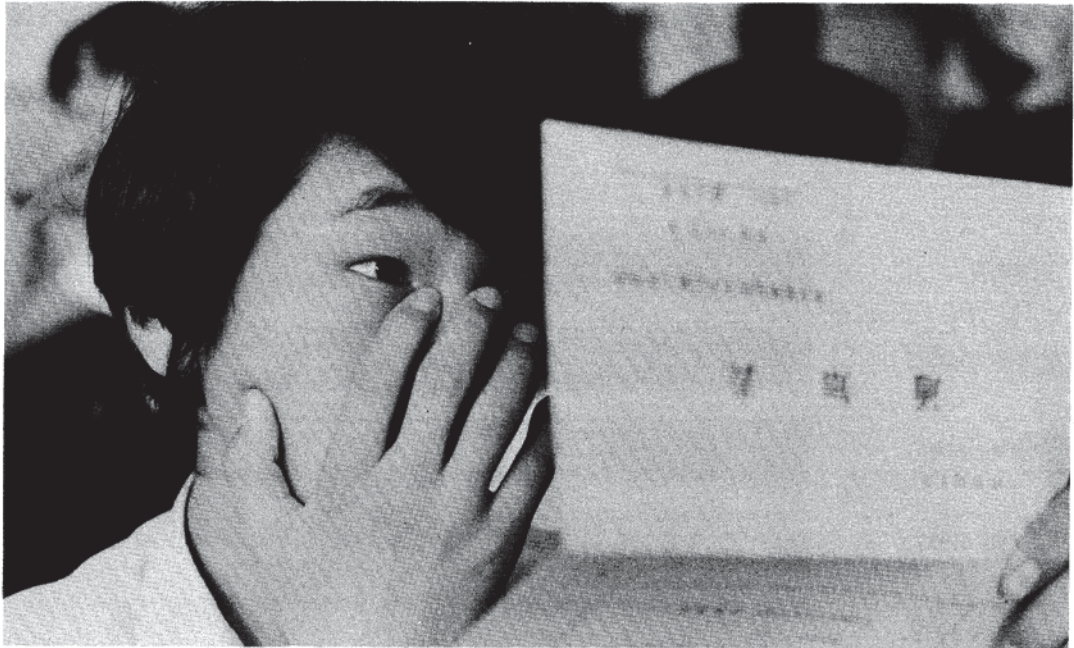
値をみると、子どもに関心を持ちすぎている気がしないでもない。そう感じ始めると、「仕事での見聞」を話す父が6割、話さない父が5%という比率も、気がかりになる。

一昔前まで職場の同僚などに、家族、特に子どものことを話す男性は少なかったように思う。しかし、このところ一杯飲みながら、子どもの自慢話や子どもへの不満を語っている男性をみかけることが多くなった。

かつての男性が「武士は食わねど高揚子」的な、身内のことを語りたくとも語らないやせがまんの徒であったとするなら、現在の父

親に、やせがまんのなさを感じる。たてまえにせよ、子どものことは妻に任せてある。職場では、身内の話はしないというようなけじめが失われたのであろうか。

こうした傾向は、好意的に解釈すれば、**父親の人間化**ともいえよう。しかし、やや皮肉な見方をするなら、**父親の母親化**にも通ずる。なぜなら、子どもの自慢話をするのは、母親たちの専売特許と考えられていたからである。いずれにせよ、父親たちが、かみしもを脱いで、人間的になった事実は否定しがたい。



*写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

■第三章———■子どもについて～現状と将来の見通し～

1. 子どもについて知っていること

成績を知っている父親は84%

昔の自伝などを読んでいると、子どもに無関心をよそおっていた父親が、ふとした機会に素顔をみせ、自分を見守っていたことが分かるというような叙述に出会うことが少なくない。

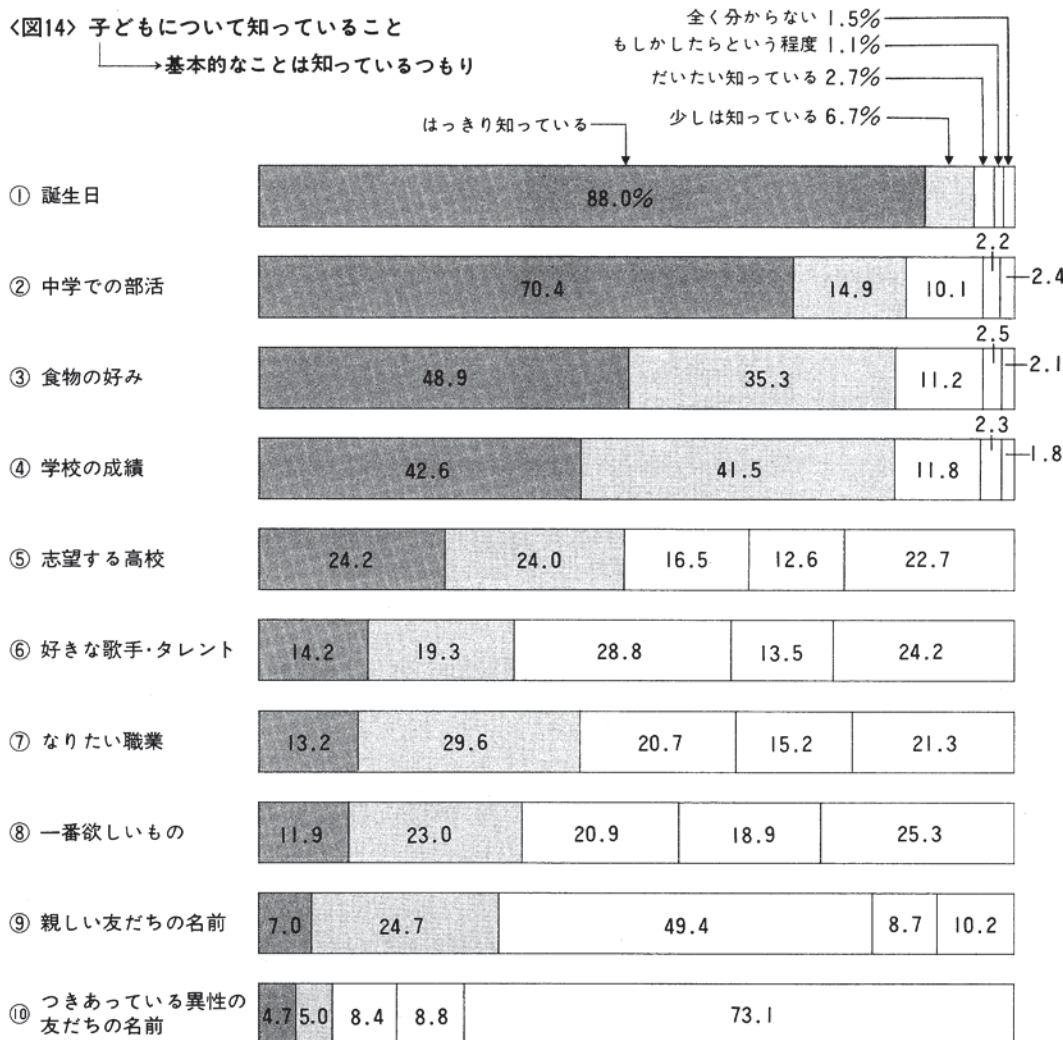
そうだとすると、かつての父親たちも、それなりに子ぼんのうであった印象を受ける。しかし、男子たるものは、喜怒哀楽の感情をあらわにすべきでないというしつけを受けてきただけに、多くの父親は寡黙の人だったような気がする。

いわば、そうした「強いられた父性」のたが

が失われただけに、現代の父親は、人間的に子どもへの愛情を吐露しているのであろう。そうした感じが、今までにふれたような子どもへの愛着となってあらわれている。

そこで、この章では、**子どもに対する気持ちをもう少し、細かく考察していく**ことにしたい。

まず、**図14**に目をとめて欲しい。これは、父親たちが、子どものことをどの程度知っているかをたずねたもので、具体的には、①「誕生日」から⑩「つきあっている異性の友だちの名前」まで子どものことについて「はっきり知っている」から「全く分からない」までの5段階で評価を求めている。父親が「知って

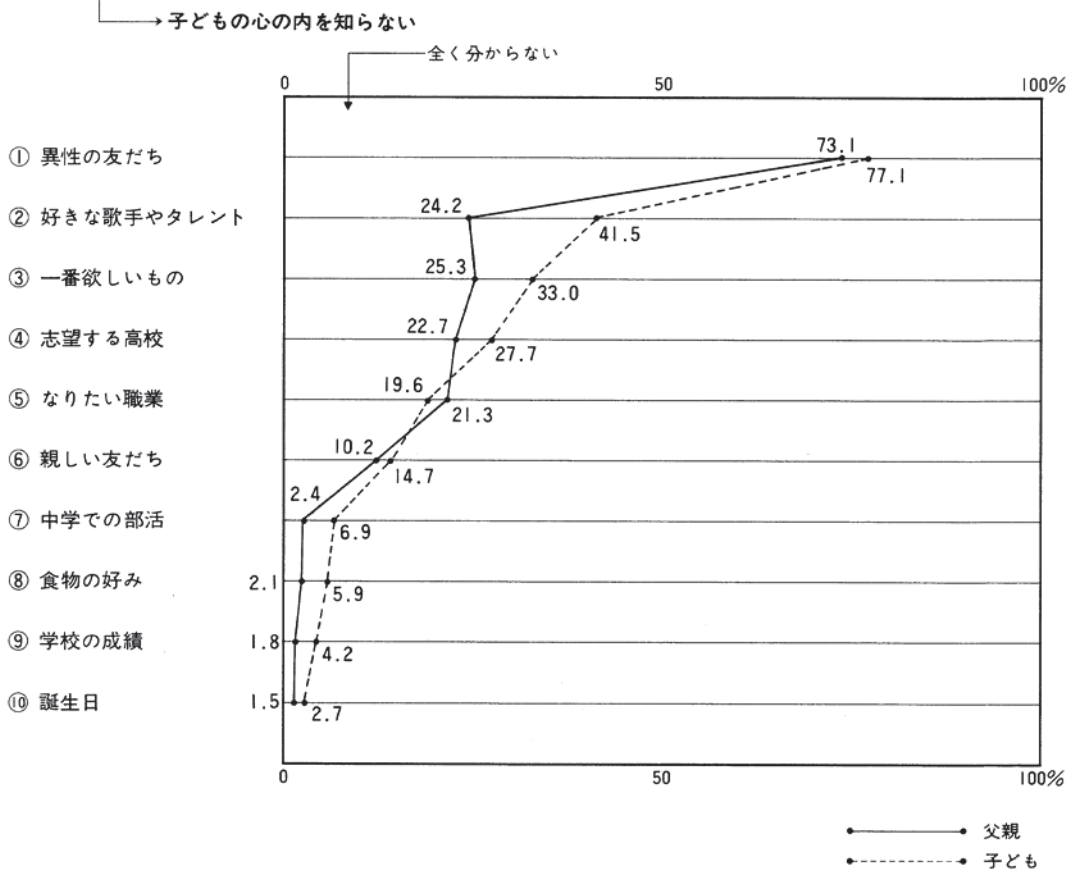


いる」と答えた割合の高いものから順に並べてみると、④「学校の成績」までと、⑤「志望する高校」以下とで知っている量が二分されている。「部活」や「成績」のような、子どもの基本的な問題については、8～9割の父親が、当然のことながら分かっていると答えている。しかし、子どもに関心を持っている割合には、⑧「欲しいもの」や⑨「親しい友だちの名」を知っている者が3割強というのは少ないような気がする。

もっとも考えてみると、父親たちは、昼間働きに出ており、子どもとの接触は、夜の何時間かにすぎない。したがって、「昼間の子ども」の姿を知らない。その上、中学生ともなると、勉強をする時間が長くなるから、父と子が話し合うのは、食事の時ぐらいなのかもしれない。

子どもに愛着を感じていても、子どもの心をつかみきれない。そうしたもどかしさを感じている父親が多いのであろう。

〈図15〉 父親には全く分からないだろうというパーセント



しかし、図15に示したように、子どもたちによれば、図14の結果でも、父親の認識は甘すぎるように思える。②「好きなタレント」は知らないだろうに例をとれば、父親24%に対し、子どもの評価は42%に達している。また、「一番欲しいもの」も25%、33%と8%の開きを示している。

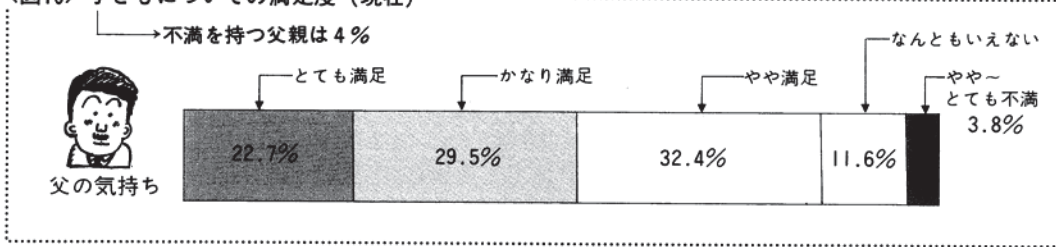
もっとも、次から次へと新人が登場し、学芸会のような稚拙な曲を歌う。それが、ヒット・チャートの上位を占める。カラオケで、なつかしのメロディを口ずさむ中年の父親たちとは、あまりに異質の世界である。「欲しい

もの」にしたところで、ブランドもののスポーツバッグ、あるいは、しゃれたワンポイント入りのTシャツや脱色をしたジーンズなど、子どもの望むものは、父親の好みを越えたところにある。

こう考えてくると、子どもの気持ちを細部まで知るのには不可能だし、それ以上に、知る必要もないように思えてくる。子どもの心情を支える輪郭をとらえておけば、それでよいのではないか。そうした意味では、子どもを知る量は、図14の程度で十分とも考えられる。

2. 子どもに対する満足度

〈図16〉 子どもについての満足度（現在）



子どもに満足している 父親が85%

そこで、父親たちが我が子に対して抱いている気持ちを、大まかにとらえた形の考察を進めていこう。

まず、父親が我が子の現状に全体としてどの程度満足しているのか、父の気持ちをたずねたものが、図16である。「とても満足している」から「とても不満」まで7段階で評価を求めた結果であるが、予想される以上に、父親たちの子どもの現状に対する満足度は高い。「とても満足している」者が23%。「かなり・やや満足しているまで含めると、85%の父親が肯定的にみていることになる。そして、はっきりと「不満」をあらわした者は4%にすぎない。

父親のほぼ半数が子どもにかなり満足しており、「やや」も含めると、満足度が9割に近づく。こうした結果は、何を意味しているのだろうか。

生まれた子どもに大きな望みを託して命名をする。そして、よちよち歩きの間を経て、入園式を迎える。親として、希望の抱ける季

節である。しかし、小学校高学年から中学生になるにつれて、成績や友だち関係、性格などに、子どもなりの限界が見え始める。葉隠にもじっていえば、「子育てはあきらめと見つけたら」のような心境になると思うのだが、どうしたことか、本サンプルの父親たちは、子どもに高い満足感を示している。

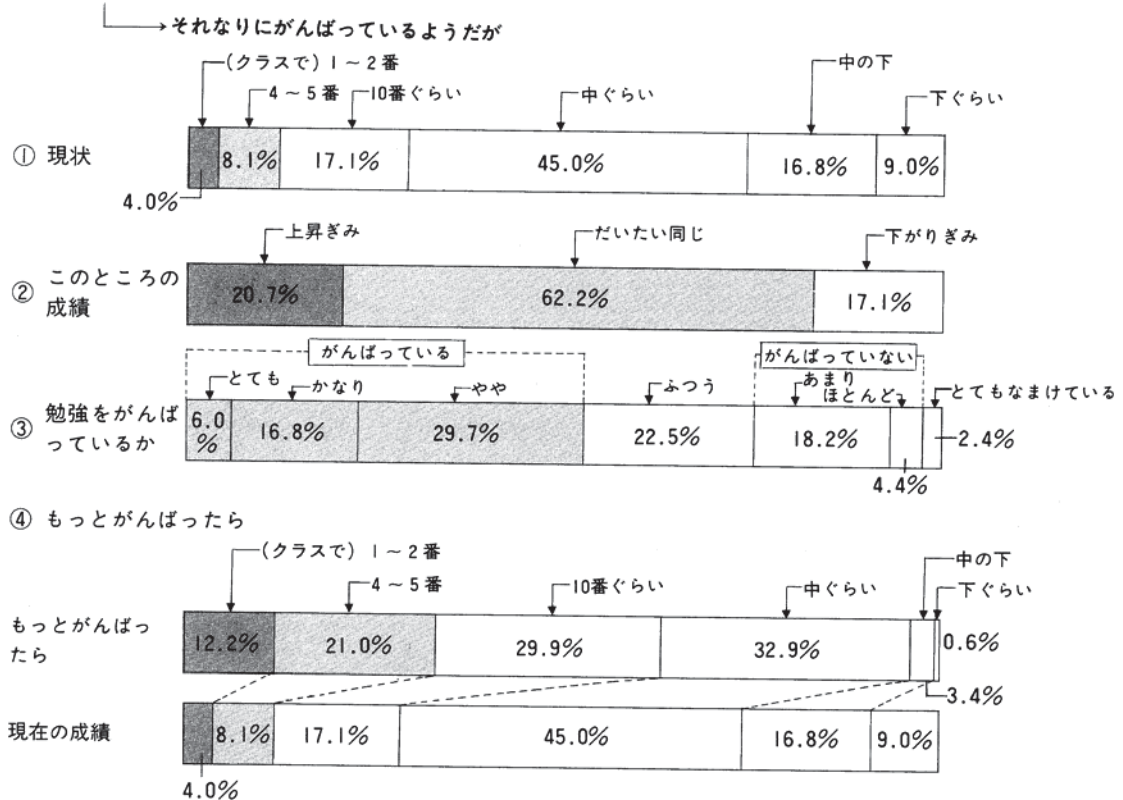
無理をしてまで 大学へ進ませる気はない

そこで、中学生を持つ父親にとって、最も気がかりと思われる学業成績に例をとって、満足感の背景を探っていこう。

図17に、学業成績関係の結果をまとめて示してある。詳しい数値は、それぞれのグラフを参照して欲しいが、全体の傾向を要約すると、以下の通りになる。

- ①成績の現状は「中くらい」の45%を始め、ほぼ、ノーマルカーブを描いている。
- ②そして、6割の子どもは、このところだいたい同じ成績をとっている。
- ③父親としては、勉強へのがんばりぶりを「とてもがんばっている」とは思えないが、

〈図17〉 子どもの成績



「ふつう」ぐらゐはやっていると評価している。

④しかし、もう少しがんばれば、1ランクぐらゐ成績が上がるのと思っている。つまり、「勉強をそこそこがんばっており、満足とまでいかないまでも、不満があるともいえない」というあたりが、父親たちの心情なのであろう。

なお、表5に、父親たちの教育観についての集計結果を示しておいた。技能職や自営業が多いというサンプル集団の性格を反映してか、①大学の効用をあまり重視していない親や②手に職をつけさせたい親が過半数を占めている。また、努力をすれば、成績は上がると

信じているものの、無理をしてまで、進学させる気はないと考えている者も7割を越える。

本人自身、腕一本で世の中を渡ってきた、そして、まがりなりにも、一家を構え、しあわせな家庭を築いている。だから、勉強ができるのに越したことはないが、無理なら、仕方がない。こうした考え方を、多くの父親が持っているように思える。

これが、大都市のサラリーマン層を対象として調査を実施したら、同じような結果を得られるかどうか気になるところである。しかし、そうした考察は別の機会にゆずり、もう少し、子どもに対する満足感を深めていくことにしたい。

(表5) 子どもの教育について

→無理に大学へ入れる気はない

(%)

	そう思う		そう思わない	
	全く	まあ	あまり	全然
① 努力さえすれば、どの子でもよい成績がとれるようになるはずだ	34.7	48.8	14.2	2.3
	└─83.5─┘		└─16.5─┘	
② かりに、子どもが勉強が苦手だとしたら、無理をして高校や大学へ入れるつもりはない	23.3	48.3	22.8	5.6
	└─71.6─┘		└─28.4─┘	
③ 子どもには、手に職(特技)をつけさせて早く一人前にして社会に出してやりたい	18.8	42.0	34.8	4.4
	└─60.8─┘		└─39.2─┘	
④ いまの社会では、やはりいい大学を卒業できるかどうか、子どもの将来に大きく影響すると思う	16.2	30.2	41.7	11.9
	└─46.4─┘		└─53.6─┘	
⑤ スポーツクラブに熱中しているのなら、少しぐらい勉強が苦手でもかまわない	8.7	34.9	44.1	12.3
	└─43.6─┘		└─56.4─┘	

子どもに満足している父・不満な父

今まで親のサイドから、子どもに対する満足感をとらえてきた。そこで、子どもたちが、父親の気持ちを分かっているかどうかたずねてみた。

今までのデータでは、父と子の反応は、多少のずれを伴うものの、基本的には一致したプロフィールを描いていた。しかし、満足感については、親子の間のずれが大きい。図18に示した通り、子どもたちは、父親の満足度は、

	(とてもかなり)	(やや)	
成績	9 %+	17 %	=26%
性格	20 %+	22 %	=42%
やる気	14 %+	19 %	=33%

の通り、「性格」でも4割、「成績」では26%にとどまるだろうと予想している。この結果を手がかりとする限り、8割以上の父親が子

どもに満足しているとは、とても思えないのである。

こうしたずれが生じた背景としては、子どもが、父親からの信頼を過信しているか、それとも、父親が、自分の気持ちを偽ったのかのいずれかであろう。といっても、子どもが、父親の気持ちを押し量りすぎるとは思えないので、図18の結果の方が、父親の本心を示しているとみなすのが妥当のように考えられる。

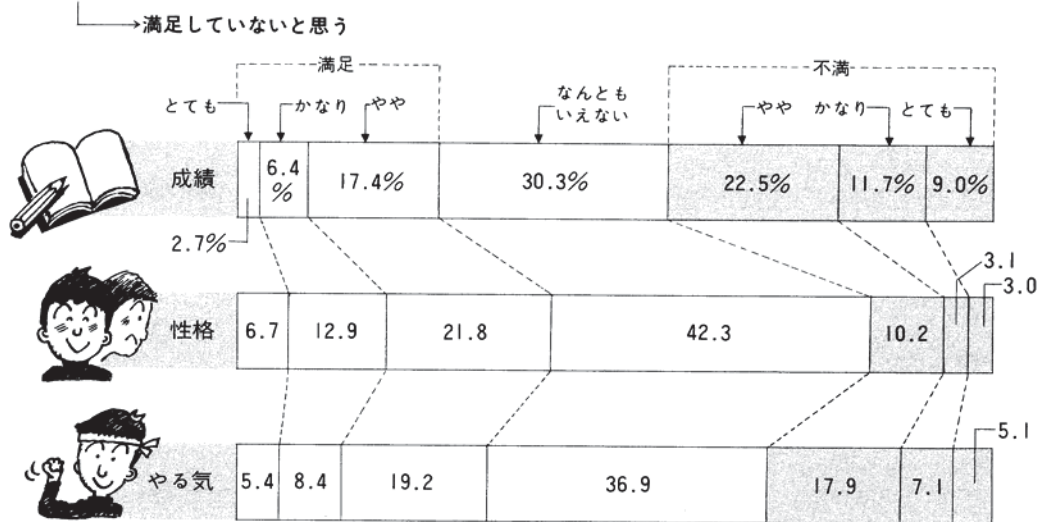
そして、こうした推定が決して誇張でないことを、図19は示している。

これは、子どもについて「満足」している父親と、そうでない父親について、満足度を規定する要因を、数量化II類を用いて分析した結果である。

グラフが示す通り、子どもに満足する割合の増す条件は、

1. 何かと相談にくる
2. 成績が上位
3. 勉強をがんばっている

〈図18〉 父親は満足していると思うか(子ども)



であり、逆に、満足感を阻害するのは

1. 成績が下位
2. 勉強をがんばっていない
3. 相談にこない

当然のこととはいえ、成績がよい上に、何かと頼ってくる子には、父親は満足しよう。しかし、怠けている上に、学業不振、そして、親子の仲も断絶しがちというのでは、父親としても、不満のひとつもいいたくなる。

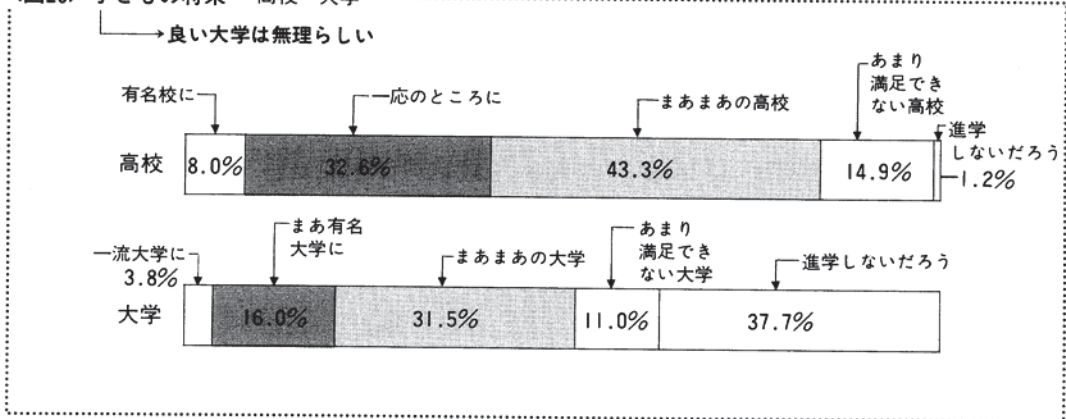
しかも、満足感を支える要因の内、「何かと相談する」はともかく、「学業成績の面で上位を占める」が大きな説明力を持つのは、すでにふれた通りである。そう考えてくると、「子

どもに満足している父親が9割に迫る」という結果は、**あきらめの感情を秘めての気持ち**のように思われてならない。

学業成績もよく、将来に希望を持ってそうならないことはないのだが、我が子にそうした期待を託すのではないものねだりかもしれない。さいわい、非行化の兆しもないし、自分のいうことも聞いてくれる。今の中学生としては、これで、一応満足せざるを得ないだろう。と、自分の心にいきかせて、多くの父親は、調査票の「まあ満足」の欄に○をつけたのであろう。

3. 子どもの将来

〈図20〉 子どもの将来 ～高校・大学～



人並みな暮らしは可能だろう

父親たちが、子どもの成績に関心を寄せるのは、成績が子どもの将来に関係すると考えているからであろう。

そこで、父親たちが、子どもたちの将来をどうみているのかを、もう少し追うことにしたい。

図20に示したように、まず、いちばん近い将来である高校について「有名校に入れるだろう」と、明るい見通しを持っている層は、8%にすぎない。しかし、「一応のところに」が33%、「まあまあ」(我慢できる程度)のところは43%と、8割の父親が、高望みをしなければ何とかなるという見通しを抱いている。

しかし、同じ図の下段に示したように、大学進学については、「進学しない」が4割、「大学には入るだろうが、まあまあ以下の大学」が4割で、希望の持てる大学へ入れそうだと思う父親は、多めに見積もっても、2割に

すぎない。つまり、高校までは何とかなるだろうが、大学進学については何ともいえないという見通しである。

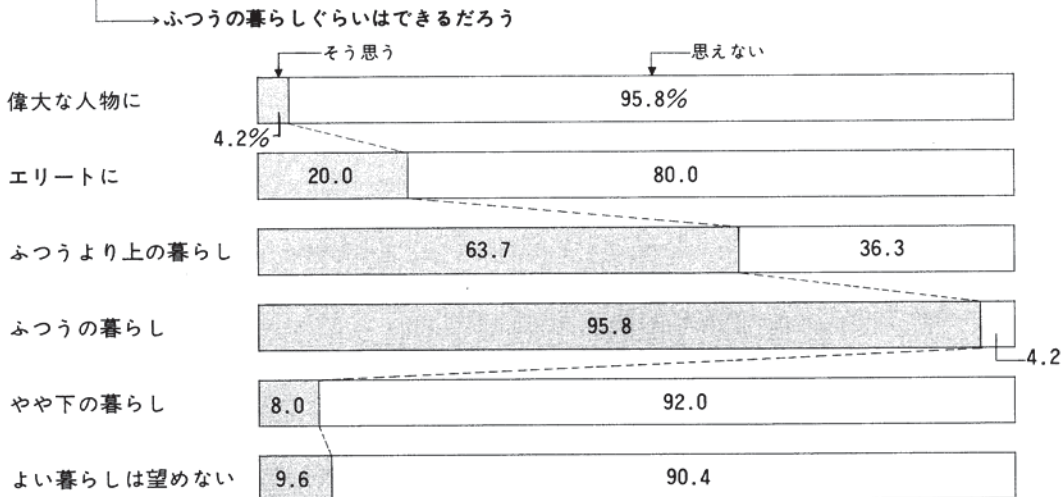
それでは、学校卒業後の見通しはどうか。

図21に示したように、我が子が「偉大な人物」や「エリート」になるとは思えないが、かといって、「みじめな暮らし」をするようになることもなかろう。「ふつうの暮らし」なら、なんとかなるという評価である。つまり、自分を大きく越えるのを望むべくもないが、人並みの生活は可能だろうとの評価である。ただ、「ふつう以上の暮らしができる」が64%に達しているが、本当に可能なのか疑問が生じないわけでもない。

心の暖かい人になってほしい

次に、父親として、「将来子どもがどんな人になってほしいか」をたずねた結果、図22にうつって、父親の望む人間像にふれてみよう。

〈図21〉 どんな人生を送るか



〈図22〉 どんな人になってほしいか

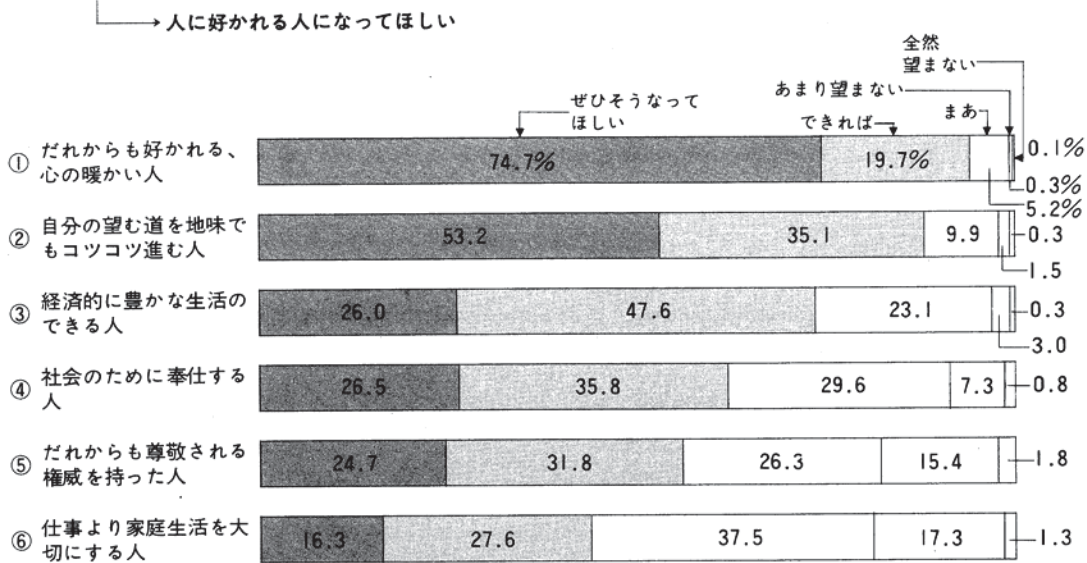


図22は「そうなってほしい」と望む割合の高いものから順に並べてあるが、まず「だれからも好かれる、心の暖かい人」、ついで「自分の望む道をコツコツ進む人」と人間味のあるまじめな人間になってくれることを望む割合が高い。経済的な豊かさや社会的な地位、権

威を持った人に「ぜひなってほしい」と望む父親はそれぞれ約4分の1程度であり、「まあできれば」そうなってほしいというのが大半を占めた。逆に父親たちにあまり望まれていないのが「仕事より家庭を大切にしている人」19%、「権威をもった人」17%であった。特にエリー

トの道を望む父親たちの声を別にすれば、多くの父親たちはだれからも好かれ、地道にコツコツと仕事をしていくような平凡な暮らしをしてくれればというささやかな希望を我が子に託しているように見える。

このように考察してみると、我が子に満足している父親が8割を越えているにしては、子どもに託している期待が小さいように思われてならない。繰り返しになるが、我が子が人並みに暮らせればよいというのでは、父親としての夢がなさすぎよう。

こうした父親も、かつては、子どもに大きな期待を抱いたのではないだろうか。しかし、子どもの現実をみるにつけ、要求水準を次第に下げ、人並みを確保できればよいと思い始めたとも考えられる。

したがって、「子どもに望む職業」は、

- ①子どもの望むもの……………48.3%
- ②技能・セールス……………15.6%
- ③ホワイトカラー……………23.2%
- ④教員……………9.0%
- ⑤セミ専門……………3.6%
- ⑥専門……………5.0%
- ⑦自営など……………6.3%

の通りである。「子どもの望むもの」が半数を占める。高望みをしても仕方ないし、子どもの人生は子どもが築くものだから、子どもに任せるほかはないというのであろう。よくいえば、子どもの自主性を認めた、冷たいいい方をすれば、子どもにあきらめの気持ちを抱いた反応である。